様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２１年　５月１１日現在

研究種目：基盤研究（Ａ）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８２０２０２６
研究課題名（和文）　遺跡出土の建築部材に関する総合的研究

研究課題名（英文）　Study on building materials from remains

研究代表者
島田　敏男（SHIMADA TOSHIO）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・遺構研究室長
研究者番号：60187432

研究分野：日本建築史
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：遺跡、建築部材、木材、石、埋没家屋、柱根、事例集、調査マニュアル

１．研究計画の概要
（１）現段階で全国から出土している出土建築部材について、既刊の報告書をもとにデータベースを作成し、公開する。（２）建築部材の調査の視点、図化・写真撮影等の調査手法を検討し、全国の研究者と議論の上、調査マニュアルの作成をめざす。（３）調査・研究マニュアルとして利用可能な事例集を作成する。（４）奈良をはじめとして、主として未発表の出土建築部材の調査をおこない、資料化・公開をおこなう。（５）日本の建築技法の参考事例をとして、韓国・中国の事例調査をおこなう。（６）研究会の開催

２．研究の進捗状況
（１）については、初年度に奈良・京都について作業をおこない、その上でデータベースの構成・活用方法・作業効率を検討し、データベースの構成・作業内容を見直した上で、北海道から作業を再開し、２０年度末には東海地方まで作業が完了し、２１年度には鹿児島まで作業が完了する予定である。（２）については、実際の部材調査を通して、調査方法の試しをおこないつつ検討を重ねると同時に、各地でおこなっている調査方法の調査をおこない、１９年度に開催したシンポジウムで全国の関係者と議論をおこない、一定の共通認識を得、ある程度のマニュアル化の見通しを得た。（３）については、発掘担当者かたら、総覧的な事例集でなく、出土した物がどのような建築部材であるかの判断材料となるような事例集作成の要望があり、それをもとに、事例の選択、事例集体裁の素案を作成し、研究会を開催して検討をおこなった。その上で、２１年の完成をめざす。（４）については、奈良県内については 18 年度から継続して飛鳥・藤原の寺院跡出土の建築部材の調査をおこない、20 年度からは平城京出土の約 1000 点におよぶ柱根の整理に着手した。県外については主として、18・19 年度には秋田県胡桃館遺跡、20 年度には徳島県観音寺遺跡をおこなっており、21 年度には静岡県山木遺跡・鹿児島県中津野遺跡の調査を行う予定である。（５）日本の建築部材の検討のために基礎資料を収集得た。（６）については、１９年度に調査法に関するシンポジウムを、２０年度には事例集・調査マニュアルづくりの研究会を開催した。なお、１９年度のシンポジウムの記録については、印刷の上、配布した。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
データベースについては２１年度の完成を目指して作業が進んでいる。また、関係機関の協力のもと、出土建築部材の調査を随時おこなっている。何より、データベース作成、調査、シンポジウム、研究会を通して全国の関係者との連携を構築し、建築部材の調査研究に対する理解が深まりつつある。そして、今回の研究プロジェクトの２１年度での到達点として、遺跡出土建築部材の調査・研究の基礎づくりをおこなうという共通認識を築き、それに向けた作業をおこなっている段階である。したがって、研究は、おおむね順調に進展していると判断する。

４．今後の研究の推進方策
計画の従って、２１年度に４年間の研究のとりまとめをおこなうが、その内容は主として、

出土建築部材の調査研究の基礎的づくりを主眼とし、その結果を関係機関・関係研究者・関係発掘担当者に広く公開する予定である。なお、当研究プロジェクトが修了後、２２年度以降は、今回の成果にもとづき、次の段階として、出土建築部材の研究の展開を目指した研究プロジェクトをおこないたい。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
箱崎和久「胡桃館遺跡埋没建物の部材にみる建築技法」『奈良文化財研究所紀要』2008　査読無　p.12-13
箱崎和久「藤原宮出土の柱根」『奈良文化財研究所紀要』2007　査読無　p.22-23
岡村道雄「焼失竪穴建築研究の方法と可能性」『奈良文化財研究所紀要』2007　査読無　p．42～45